

大谷大学

# 親鸞エッセイコンテスト

## 「人間ってなんだろう？」

### 受賞作品集

#### 募集要項

- |  |   |
|--|---|
| <p>1. 募集内容 「人間ってなんだろう？」をテーマにエッセイ形式で書いてください。【800字以内】<br/>本コンテストについては、下記 URL でご確認ください。<br/><a href="http://www.otani.ac.jp/shinran16">http://www.otani.ac.jp/shinran16</a></p> <p>2. 応募対象 中・高校生</p> <p>3. 応募方法 ①ワープロ、または手書き<br/>②チラシの裏面、または大学ホームページに用紙のデータがありますので、そちらをご利用のうえ、応募作品に氏名（ふりがな）・住所（〒）・電話番号・学校名・学年を記載して下記宛に送ってください。</p> <p>【郵送】〒603-8143 京都市北区小山上総町<br/>大谷大学企画課<br/>「親鸞エッセイコンテスト」係<br/>【FAX】075-411-8149<br/>【メール】<a href="mailto:kikakuka@sec.otani.ac.jp">kikakuka@sec.otani.ac.jp</a></p> | <p>4. 応募期間 2016年7月15日（金）～10月7日（金）必着</p> <p>5. 表彰 各部門から最優秀賞1名<br/>※賞状・副賞（図書カード3万円分を贈呈）<br/>各部門から優秀賞2.3名<br/>※賞状・副賞（図書カード1万円分を贈呈）<br/>奨励賞若干名<br/>※賞状・副賞（図書カードを贈呈）</p> <p>6. 受賞発表 受賞作品は、11月11日（金）に大谷大学ホームページにて公表・掲載（奨励賞は氏名のみ）<br/>します。<br/>なお、応募作品は返却しません。また応募作品の著作権はすべて大谷大学に帰属します。</p> <p>7. 問合せ先 大谷大学企画課「親鸞エッセイコンテスト」係<br/>TEL. 075-411-8115</p> |
|--|---|

協力・後援 協力：真宗大谷派（東本願寺）、真宗大谷派学校連合会 後援：京都市



【高校生部門】

## 最優秀賞

伊那西高等学校 第1学年

かみぬま さあや  
上 沼 咲 彩

「大丈夫？」

と心配してくれる声がある。そして、あたたかいぬくもりを感じた。

中3の夏。私は起立性調節障害と診断された。めまいや、動悸、ひどい時には何度も倒れた。命に関わったり、重いものではない。だが、今まで健康だった私にとってはつらいものだった。倒れるたびに、友達がおぶって保健室まで運んでくれた。そのたびに、私は皆に迷惑をかけているんじゃないかと不安でたまらなかった。

そんなある日のこと。動悸がして、体がすごく重たくて、立ちあがれなかった。正直、本当に怖かった。そんな私に気づき、友達が集まってきてくれた。だが、次は移動教室。私のせいで皆を遅らせるわけにはいかない。これ以上迷惑をかけたくなかった。

「先に行って。」

そう言ったが、友達は無視。一人の子は、私をおぶって階段をかけ下り、他の子も途中で肩をかしてくれたり、いつのまにか教科書類を持っていてくれた。

私はハッとした。皆本気で心配してくれているのに、私は何を心配していたんだろう。迷惑じゃないかと思うあまり、素直に皆のこの優しさを受け入れないなんて、逆に皆に悪いことをしているじゃないか。この時、友達のぬくもりと、そして先生や家族のありがたさが身にしみた。

高校に入って、

「優しいね。」

と言われた。でもそれは、今まで色々な人から優しさをももらったから。あのぬくもりを知っているから、人に優しくできる。そして、沢山感謝もできる。優しさは、比例のような関係だと私は思う。

あなたも周りを見わたしてみしてほしい。沢山の優しさ、そしてその先には沢山の笑顔で溢れているはずだから。





【高校生部門】

## 優秀賞

北海道大谷室蘭高等学校 第3学年

にしむら ひめか  
西村 妃香

私は今日迄、何不自由なく生きて来ました。両親のお陰で学校に通い友達に恵まれ、毎日幸せな日々を送っています。ですがそんな私はひどい人間です。

私は誰かが成功を収めても上辺では拍手や祝福の言葉を述べていても心の中では羨ましい、悔しい、私の方が…とと思ってしまい、心の底からの祝福が出来ないのです。

私はひどい人間です。自分が失敗をしてしまい誰かに怒られそうになったり、責任を取らなければならない時私はどうにかして怒られないように、責任をとらなくて良いように自分が大切なあまり自分の為に頭を働かせて事実には嘘をつくことがあります。

私はひどい人間です。困っていたり、助けを求めている人がいれば私は手を差し伸べます。そういう人達を私は助けたいと思っています。でも私は自分にそう言い聞かせているだけで本当は、良いことをすればこの先きっと何か見返りがあるかもしれない。と思っています。

自分の気持ちとは反して周りにどう見られているのかを常に考えて行動に移していくのが私です。誰かに悪口や噂話を言われたりしていないかを気にして、何か人間関係でトラブルがあればすぐに周りに助けを求めて話が大きくなるようにするのが私です。

あの子は出来るのに、あの子は持っているのに何故、私は…と自分と他人を比べて一喜一憂するのが私です。

世界は私を中心に回っているのだと思っているのが私です。

私と同じ考えを持っている人がいれば何の迷いもなく周りと一緒にその考えを、その人を否定できるのが私です。

何が正しくて何が間違いで何の為に頑張るのか分からない私は人間です。私は本当に人間ですか。人間とは何ですか。私はまだ分かりそうにありません。





【高校生部門】

## 優秀賞

京都光華高等学校 第1学年

ただ あいみ  
多田 愛海

「裸で生きていたい。」私はつくづくそう思うのである。人は裸で生きられたらとても楽になると、そう思うのである。

親鸞聖人が亡くなられて、今年で七百五十四年になる。七世紀と半分の長い月日が経った今でも、人々の心は貧しく、親鸞聖人が目指された世界には程遠い。大人も子供も関係なく、みんなが心に鎧を着せている。その鎧は、ある時は自分が共感できないことでも人に合わせ、相づちを打って話を合わせる為に使われ、またある時は愚痴や悪口でつながって和を作り周りに浮かないよう自分を守る為に使われる。そんな重たいものを全て脱ぎ捨てて生きていくことはできないのだろうか。

私がそのように考えるようになったのは、高校生になってからである。私はこれまで、人に合わせたり、相づちを打って何でも合わせていた。そうすることで角がたたないなら良いと思っていた。でも、何でも合わせていたことで結果的に友達を傷つけてしまったことがあった。

そんな時、宗教の教科書でふと目にとまった「悩み」という文章に書かれていた『(人は)みずから環境にたちむかい、環境をかえていくことができる。(中略) 本当に生きるためには、たとえ不適應者として排斥されても孤独を選ぶであろう。』(佐田新編 現代青年の悩み)という文に心を動かされた。

私は、本当に生きるとは、自分の命を精一杯生きていくことだと思う。自分の命を輝かせて生きていくことだと思う。人間は心が弱く、自分を守る為に心に鎧を着てしまいがちだが、人は変わり成長することができる。私は誰かの心から鎧を取ってあげられるような人になりたい。自分を作るのではなく、素の自分で生きていきたい。私は、今日も裸の心で自分だけの道を自分らしく歩んでいこう。





【高校生部門】

## 奨励賞

昭和学園高等学校 第3学年

まつもと みなみ  
松本 南

私が小学校 2 年生のときに、私のいとこのお兄ちゃんが川で溺れて亡くなるという出来事がありました。ちょうどその日、家族みんなでそのいとこの家に遊びに行っていました。私は 3 人兄弟ですが、3 人ともお兄ちゃんのことを大好きで、その日も 4 人で家の中でゲームをしたりして遊んでいました。しばらくしたら、お兄ちゃんの友達が「川で遊ぼう。」と言って、お兄ちゃんはその友達と川に行ってしまいました。お兄ちゃんが家を出る時、「また今度いっぱい遊ぼうね！」と言ったことをよく覚えています。その後しばらくして、私は家族といっしょに家に帰りました。それから何時間かたち、家に 1 本の電話がかかってきました。お兄ちゃんが川で溺れて見つからないという電話でした。頭の中が真っ白になり、何も考えられませんでした。その日のうちにお兄ちゃんは見つからず、次の日、その次の日も見つかりませんでした。そしてお兄ちゃんが溺れた日から 3 日後、遺体となって見つかりました。家族、親せき、友達など、たくさんの人が泣いていました。その時、人が 1 人亡くなれば、その人を愛していた、たくさんの人が傷つき、苦しみ、悲しむということを学びました。そして、人はいつ死ぬか分からない、人間の命はそれほど重く、またそれは人間だけでなく、命のあるすべてのものが尊いものだということが本当によく分かった出来事でした。

「また明日」といって明日必ず会えるわけではない、もしかしたら、明日は来ないかもしれない、と 1 日 1 日を後悔なく大切に生きることはとても大事なことだということも学ぶことができました。

お兄ちゃんが亡くなったのは高校 1 年生でした。私はお兄ちゃんの年齢を追いこし、高校 3 年生になりました。お兄ちゃんが生きられなかった分、周りの人たちがそれからの人生をどう送るかを考えて、お互いに助け合って生きていきたいです。





【高校生部門】

## 奨励賞

磐田北高等学校 第2学年

すずき まさえ  
鈴木 蒔咲恵

「よければ座ってください。」

この一言が電車の中に響き渡る。凜とした声で発したのは私の弟だった。

当時、弟は小学生だった。人前を好むわけでもなく、大人しい、普通の男の子だ。そんな弟が、勇気を出して言った言葉は誰もが言うことができるはずの言葉でありなかなかないうことが難しい言葉である。

胸が熱くなる。小さくて可愛い弟が人のために行動していることに。勇気を出したことに。そして同時に悲しくなる。子どもの手本となるべき大人たちが見ているだけで何も動かなかったことに。私自身を含めた大人が動くべきだったのに。しかし、弟の発した言葉は、その場にいた人たちを後悔させたのではない。心を温かくしてくれたのだった。

「ありがとねえ。優しいねえ。」

弟が声を掛けた方は、弟に感謝と誉め言葉をふりそそいでくださった。その時の弟の恥ずかしげな表情と誇らしげな眼を忘れることができない。電車の中が毛布のような温かいものにくるまれているような気がした。

周りの人の表情が優しくなったように見えた。気のせいかもしれない。しかし、私は心が清らかに、美しいものになった。そんな気がした。

人はもろく傷つきやすい。しかし反対に、人の思いやりという愛にふれると、すぐに心が温まる。愛を家族や恋人や友人、それだけではなく、見知らぬ人にたくさん注ごう。恥じらいを捨てることで見える世界が大きく変わる。自分を変えるチャンスはたくさんあるのだから。

しかし私は恥じらいを捨てきれしていない。なぜなら、この出来事の感動を弟に話していないからだ。だって私は、彼の「お姉さん」だから。手本になりたいから。だから、この話をするのは私も弟も、もう少し大きくなってからにしようと思う。





【高校生部門】

## 奨励賞

飯田女子高等学校 第2学年

しばた きょうか  
芝田 杏華

「自分は一人ではない」。日常に埋もれがちなその事實は、ひとたび自信を無くすと見失ってしまいます。私の場合、それを拾い上げてくれたのは他人の心でした。

中学二年生の冬の事です。周りが次々と自らがしたい事、進学する高校を決めていく中、何も決まらない私は焦っていました。その頃やる事なす事、全て上手く行かず、憂鬱でした。ある日、部活の朝練に影響が出る程の寝坊をし、遅刻すまいと走って登校するのですが、真冬の雪道、氷道、おまけに下り坂、豪快に転びました。背中から太ももにかけて鈍い痛みがジワリと襲います。体の奥から喉に向かって、何か熱いかたまりがこみあげるのを感じながら、立ち上がり、一步踏みだしたところ、また転びました。私が転んだ場所は人気がない山道で、とても薄暗い所でした。時が止まっているかのような静寂に包まれ、軽い鳴咽と共に涙がたまりました。すると一台の車が私の横に止まり、おじいちゃんが窓から顔をのぞかせました。時々すれちがうくらいの、話した事もないおじいちゃんでした。その人の「乗ってくか？」とだけの、少しぶっきらぼうなこの一言に、迷子だった私を見つけだしてくれた親の手の感覚が重なりました。学校まで送り届けてもらったその日一日、心が温かく満たされていました。

もし、自分が世の中に置いていかれる感覚に陥ったら、友達や親と、同じ話題を共有できる喜びや、好きな人と同じ時を生き、思い出が増えていく幸せを思い出してほしいと思っています。過去に置き去りにせず、持ち歩いてほしいです。自分は一人ではない事に、まず励まされた先に、周りも人間だという事に気がつけると思います。きっと相手もいつぞやの自分のように、自分を見失う事があると思います。今度は私が、あなたは一人じゃないよと行動で、ありったけの心で示したいと思っています。





【中学生部門】

## 最優秀賞

大谷中学校（大阪） 第2学年

にししか くるみ  
西坂 来美

「ガイジだ。目を合わせたら、ダメだよ。何されるか分からないし。」

学校からの帰りの電車。私は友達から言われたこの言葉に傷ついた。「ガイジ」とは障害児の事だ。私がもし「一般」の家庭なら何も思わなかっただろう。しかし、私は傷ついた。なぜなら、私の弟は友達という「ガイジ」なのだ。

私がこの事、つまり「弟が障害児であること」を知ったのは小学一年生の時だった。私は疑問があった。「なぜ弟は幼稚園の年少なのにも関わらず言葉を話せないのか。」私は母に聞いた。すると母は「それは〇〇（弟の名前）が、生まれつきゆっくり育つ特性をもっているからだよ。」と教えてくれた。私は、あまり良く分からなくて、とりあえず「弟は全てのことが皆より出来ないんだ。」と解釈した。

それから四年がたち、弟が小学校へ入学した。ある日、弟が小学校でかいた絵をもってかえってきた。私はあまり弟がかいた絵を見たことがなかったので、「下手だろうな。」と思いつつ見た。鳥の絵だった。たくさんのいきいきとした鳥の表情。私はこの瞬間「皆より出来ない。」と弟の事をどこかで見下していた自分が恥ずかしくなった。それと同時に私は「障害ってなんだろう。」と思った。皆は「障害者は普通じゃない。」という。じゃあ友達も、普通じゃないから目を合わせないのか。普通じゃなくて何が悪いのか。こういった疑問が出てきた。思いかえすと世界では「普通じゃない。」とって迫害されている人がたくさんいる。でも、今「普通じゃない」といわれている人がたくさん集まったら「普通」になる。この事を考えると、「普通じゃない」ことは悪いことではないと私は思う。

親鸞さんはたくさんの方々に生き方を説いてらっしゃいました。私はあなたに「普通」とは何か聞きたいです。親鸞さん、「普通」とは何ですか。







【中学生部門】

## 優秀賞

札幌大谷中学校 第2学年

なかじま りん  
中島 凛

私にとって人間とは、とても悲しい生き物だと思います。どんなに苦しくても戦争をし、どんなに辛くても自然を滅ぼす。分かっているのにいじめ、分かっているのに食べ物や命を粗末にします。

私たち人間はよく、人に対して「自己中なヤツだ」と言い、軽蔑しますが、おそらく人間以外の生き物から見たら、何よりも自分勝手に自己中心的なのは人間そのものだと思います。最近では絶滅動物やけがをした動物の保護活動を積極的に行っていますが、本当に立派なのは人間では無く、どんなに傷つけられ、数が減っても一生懸命に生きようとしている動物たちなのです。

私は毎日のように思います。人間さえいなければ、動物たちはもっと幸せだったのかもしれない。私たち人間の下らない「ケンカ」のせいでどれだけの動植物が命を落としたのか。おたがいに殺し合い、命を粗末にする人間よりも、たくさんの生き物を支えている植物の方がずっと立派で、かっこいいとさえ思います。

親鸞が共に生きようと願った人間が世界を壊してしまうかもしれない。それを知ったら彼はどう思うのでしょうか。それでも共に生きたいと思うのでしょうか。同じ時代で生き、同じ様に自然を破壊して生きている私ですら、その生き方にうんざりしているのに。

親鸞が言うように、人間は本当に欲に満ちています。食べ物を好きなだけ食べ、肉食動物から命を常に狙われているわけでもない。これだけでも十分幸せなはずなのに、それ以上を求めてしまう。もっときれいになりたい、もっと広い家に住みたい、土地がほしい、偉くなりたい、お金がほしい…。現に私もほしいものがたくさんあります。満足できないこともあります。その満足できないことの1つが、この人間の生き方です。人間たちは生き方を考え直すべきだ、そう望むことすら正しいのか。人間は悲しい生き物だと思います。私もその1人です。





【中学生部門】

## 奨励賞

大谷中学校（大阪） 第2学年

しばた ふう  
柴田 楓

私は毎日、日記を書いています。その日あったことを、出来るだけ細かく書いては、今まで書いて来たことを、読み返したりしています。いつもの様に、パラパラとページをめくっていると、とある日の日記に、「特に何もなし」と書いてありました。このような文章を書く時は、別に何も感じていませんでした。しかし、私はこの文を見た時、（何だか、この日一日を、無駄に過ごしてしまったみたいだなあ。）と思ったのです。

私が日記を書き始めた理由は、生きて来た一日一日を、記憶から忘れて、まるで無駄に生きて死んでしまうのが怖かったからです。「死」がとてつもなく怖かった私は、体験した出来事を書き留めておくことで、毎日意味のある一日を生きたと満足していたのかもしれない。日記を書いたからといって、本当に大切にその日を生活したとは言えないのです。

では、本来の、命を大切にするとはどういうことなのでしょう。今まで私は日記を書いて、自分一人の命のことを考えていました。つまり、私を支えてくれる周りの命を忘れていた気がします。

この命は、いつか無くなってしまうから、粗末になんて出来ないのではありません。数え切れないほどのほかの命に、支えられているからなのだと、思います。植物や動物や水、そしてもちろん友人や家族がいて、成り立つ、命なのです。

一日中沢山のことをこなして忙しい日もあれば、一日中何もすることがなく、暇な日もあります。でも、この命に関わる人や物に感謝することを忘れなければ、命を大切に出来たと思います。今日から書き残す日記は、何か変わるかもしれません。



